あとがき

笑っているマン・レイ

この展覧会は当画廊恒例のオマージュ瀧口修造展で，九回を数えるが，今年はマン・レイ Man Ray (1890～1976)の作品をオブジェ中心におみせすることとなった．展示作品はオブジェ31点，写真5点(リー・ミラーによるマン・レイの肖像を含む)版画18点計54点である．この展覧会のためにポスター(マン・レイが撮ったオブジェ "イジドール・デュカスの謎")を作成したことを申し添える．

カタログのテキストは次の四氏に寄稿をお願いした．伊藤俊治さんには「物の眼の謎 ―― マン・レイのオブジェ ――」と題し，マン・レイのオブジェ論を展開していただいた．巌谷國士さんには「人と光線/瀧口修造と写真」と題し，マン・レイと瀧口修造の関係を写真を通して述べていただいた．宮脇愛子さんには「リュー・フェルーのアトリエ ――ユーモアと諧謔と夢に満ちたオブジェたち――」と題し宮脇さんとマン・レイとの希有な交友から生じたマン・レイ像を描いていただいた．最後に石原輝雄さんには「回転する平面卵」と題し，マン・レイの熱狂的なコレクターの立場からエッセーをお寄せいただいた．それぞれ心のこもった文章で心から感謝している．

瀧口修造先生はマン・レイに関し，数々の詩，エッセー等を残しておられるが，このカタログには次の四編を収録した．

第一は詩「マン・レイ」で，昭和11年(1936年)山中散生編集「L'ÉCHANGE SURRÉALISTE」ボン書店刊行のなかに収められている．瀧口先生は「七つの詩」と題し，マン・レイのほかエルンスト，タンギー，ミロ，マグリット，ダリ，ピカソの以上七名のシュルレアリストの画家に関し詩を発表しておられる．

次に「拝啓 マン・レイ様」は1973年にイタリヤで開催されたマン・レイ展のカタログに寄稿を依頼され書かれた文章である．わが国では「名は体を表わす」などというが，これはウソである．しかし唯一の例外はあなたであるとし光線男 Man Ray を賞賛しておられる．

第三に「マン・レイはマン・レイである」は1975年「骰子の七つの目：マン・レイ」(河出書房新社刊行)の月報に寄稿されたエッセーで，わが国における基本的な優れたマン・レイ論である．最後に笑うのはマン・レイではないか，と瀧口先生は文中で述べておられるが，これはなかなか意味深長な言葉であると思う．私もこのマン・レイ展を企画準備する作業のなかで，私なりにこの言葉の意味を体得したものである．

最後に "Man as No Ray asYes" なる詩はカタログの扉に収録してあるのでご覧いただきたい．マン・レイは1976年11月18日，パリで死去したが，その訃報を聞かれた瀧口先生はその翌日この詩を作られた．Man Ray の各々の文字を頭において作られたこの詩は中国産の紙(これは大岡信さんが先生に贈られたものときく)に毛筆で書かれている．そしてこの詩を先生は，マン・レイをもっともよく知り，その死にもっとも深い衝撃を受けられたであろう宮脇愛子さんに贈られたのである．この詩はマン・レイと瀧口修造を結ぶ友情の架橋である．と同時にこの展覧会のキイ・ポイントでもあるのだ．

マン・レイについては，瀧口先生を始め上記の四氏のエッセーをお読みいただければ十分で，敢えて私としては付け加えるところはないのであるが，この展覧会の主催者として，その企画準備，カタログ作成の過程で感じたことを述べておきたいと思う．

昨年のオマージュ瀧口修造展は赤瀬川原平「トマソン黙示録」であったが，それより前の四月に，若い友人と一夕ビールを飲んで歓談した際マン・レイと瀧口修造の話が出て，そこで来年はマン・レイと心に決めたのである．それも写真はかなり知られているからオブジェでやろうと計画を樹て，作品収集を開始した．

昨年10月末ニューヨークからパリを旅行したが，N.Yで，荒川修作さん夫妻と話をした際，マン・レイ展の計画を話すとマン・レイ夫人ジュリエットさんに逢ったら，と言う．そこで11月2日，荒川さんの紹介で，マン・レイ夫人をリュクサンブール公園のそばのマンションに女房とともに訪問し，マン・レイ展のあいさつをし一時間ばかり話した．夫人は私の知っている日本人はアイコ(宮脇愛子さんのこと)とイソザキ(磯崎新さんのこと)とアラカワの三人だけだとのことで特にアイコ，アイコとなつかしそうに話されたのが印象的であった．

ついで今年2月，ニューヨークからパリへ旅行した際，パリのアメリカ大使館で再びマン・レイ夫人とお逢いした．ワシントン，パリ，ブリュセル，リヨンを結ぶマン・レイのテレビ討論会がアメリカ大使館で行なわれるので出席しないかという，マリオン・メイヤー画廊のマダムのすすめで，私たちは初めてアメリカ大使館に行った．入館検査は厳重を極め，それを眺めているのはある意味では大変面白かった．60名ばかりが会議室に集まりテレビを囲み，1時間のショーを楽しんだ．マン・レイ夫人は何人かの人達に支えられ，歩くのが充分とは言えないが，真赤なドレスを着てお元気であった．

さて，今回オブジェを中心にマン・レイの作品をみての感想であるが，オブジェにはマン・レイのエスプリが満ちていると思う．写真では表現できないマン・レイのユーモア，ウイット，パロディ，語呂合わせ等が示されており，そこがわれわれを魅了するのである．

カタログ作成に当たっては作品のデータが極めて錯綜しており，これには正直なところ往生した．ひとつのオブジェが何回も作られているので，それを特定することが困難なのである．さる画廊から購入したオブジェがカタログレゾネとされている本の記述と異なるので照会したところ，このカタログレゾネは必ずしも正確ではない，私の方が正しいと言われる．私は画廊の言葉に従ったが，そんな具合でカタログ作成にはマン・レイに翻弄された．

思うに，マン・レイは自由自在な人なのである．そして写真家であることを忘れてはならない．写真の原版があれば，必要なときに焼増することは普通だ．オブジェもそれが必要であればその都度作られるのである．

カタログ作成に右往左往して私は苦笑いせざるを得なかったのであるが，フトこれはマン・レイの術中にはまったナと思い，これには思わず本当に笑ってしまった．なるほど瀧口先生の言われるように最後に笑うのはマン・レイであるが，ただいまは私も笑っている．ともあれ瀧口先生にお見せしても恥ずかしくないマン・レイ展になったと秘かに私は思っている．

この展覧会およびカタログ作成に当たっては多くの方々の協力を得た．作品に関してはNYのテムシィ・バウム氏，ザブリスキー画廊，パリのマリオン・メイヤー画廊，そして高橋信也さん，作品データについては石原輝雄さん(治癒しがたいマン・レイ病にかかっておられるだけその博識振りには舌を捲いた．さすが「マン・レイになってしまった人」の著者だけのことはある．)，瀧口修造に関するマン・レイ資料については熱烈なる瀧口修造ファンの土渕信彦さん，そしてマン・レイおよび瀧口修造の貴重な作品資料をお貸しいただいた宮脇愛子さんに，それぞれ厚く御礼申し上げる．

また，このカタログ作成に当たってはカメラ毎日別冊マン・レイ(1984)，ユリイカ：マン・レイ特集(1982)が大変参考になったことを記しておきたい．

最後に，ジュリエット，マン・レイ夫人と瀧口綾子夫人のご健勝を祈り，筆を擱く．

1989年6月12日

佐谷画廊

佐谷和彦